

越ヶ谷の久伊豆神社の歴史

と

秋祭り

2019 年 7 月 6 日(土)

10 : 00~12 : 00

講師：加藤 幸一氏（NPO 法人 越谷市郷土研究会）

久伊豆神社の知られざる3つの伝説

白馬伝説 足止めの狛犬伝説
一本幟旗(のぼりばた)伝説

久伊豆神社の秋祭り
幻の三層の山車(だし)
「猩々(しょうじょう)」

久伊豆神社と
陸続きだった宮本町

久伊豆神社の
分布と野与党(のよう)

対 象 どなたでも、定 員 50名(要申込)、参加費 無料

場 所 越谷市市民活動支援センター 活動室

【申込み・問合せ】
越谷市市民活動支援センター
☎: 048-969-2750



越ヶ谷の 久伊豆神社の歴史と秋祭り



「米長」
桃木宏様
所蔵

「越谷市の昭和」
より引用」

戦前

令和元年7月6日 市民活動支援センター10:00～12:00
加藤幸一

越ヶ谷の久伊豆神社に関する 聞き取り調査のご協力者



染谷隼生(としお)氏

昔の久伊豆社の秋祭り



鈴木竹美津氏

全国の主な山車の研究



松村宏司(ひろし)氏

一本幟旗伝説

田原石川氏の頁面を参考に
致しました。感謝致します。

これから紹介する古い写真は
「**越谷市の昭和**」(いき出版)
より一部を引用しました。

「越谷市の昭和」は加藤が執筆に
携わりました。

久伊豆神社の秋祭り ビデオ (5,6年前)

川島健司氏作成

江戸時代の越ヶ谷の久伊豆神社の 知られざる「白馬伝説」

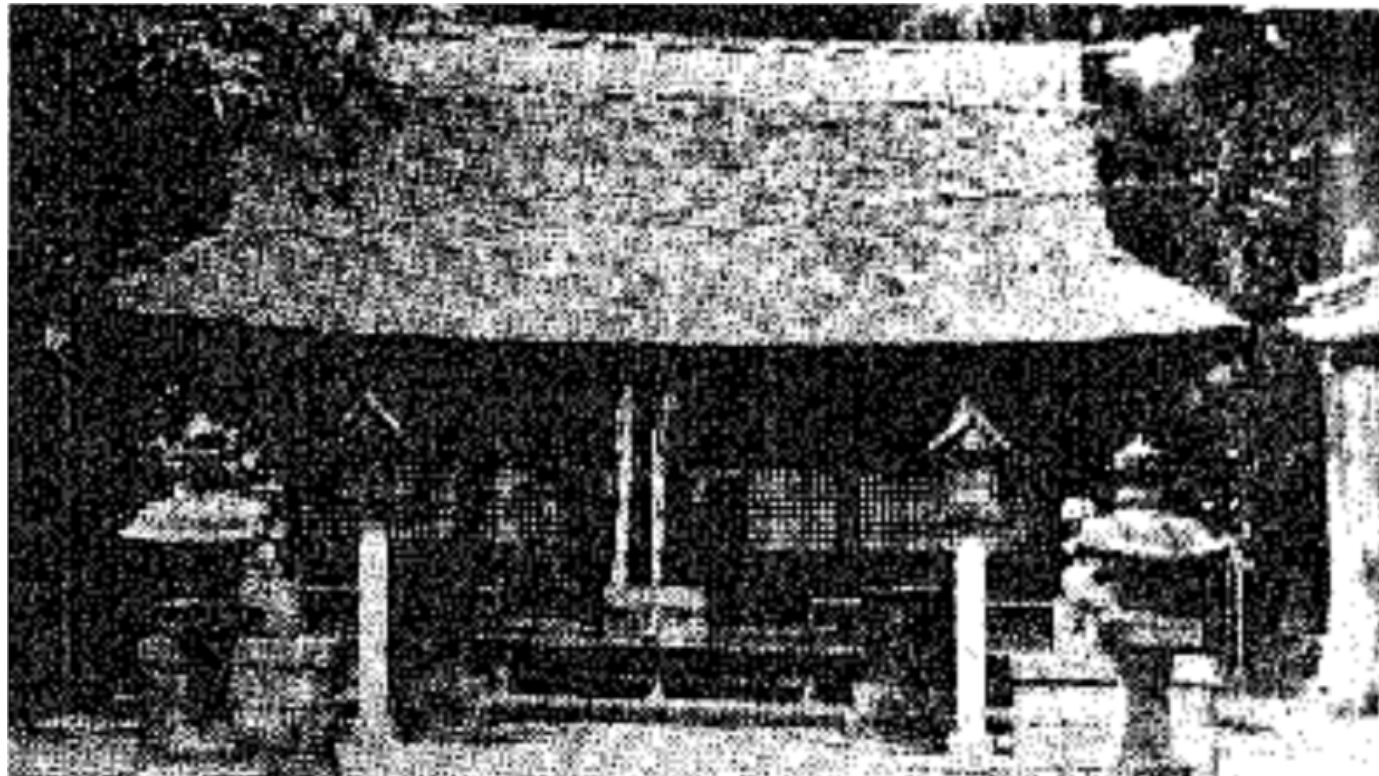
絵馬の神馬に馬子(伊三郎)と手綱を加筆

明治初期の一本幟旗(のぼりばた)伝説

四町野村と瓦曽根村の用水の争い

今も伝わる「足止めの狛犬」伝説(拝殿の向かって両端)

昔は拝殿の前に一対置かれ、荒縄で縛られる狛犬。悪所通いの夫をやめさせる妻の願い



江戸時代の越ヶ谷の久伊豆神社の 知られざる「白馬伝説」

絵馬の神馬に馬子(伊三郎)と手綱を加筆



インターネットより取得

明治初期の一本幟旗(のぼりばた)伝説

四町野村と瓦曽根村の用水の争い

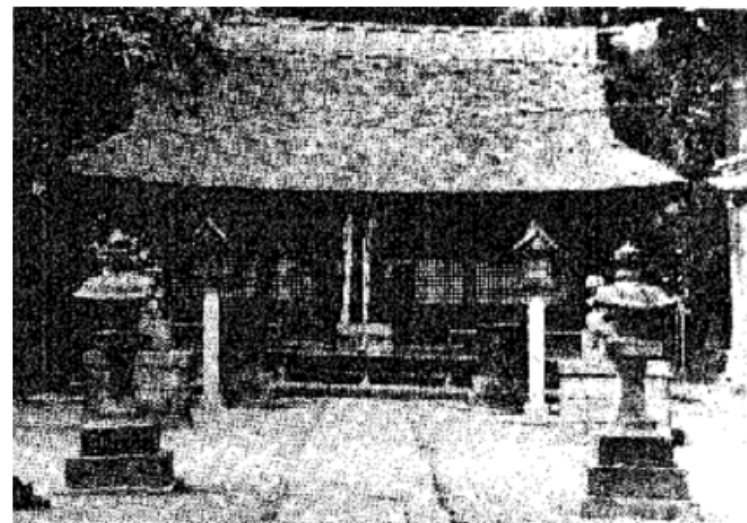
松村宏司氏が若いときに大野伊右衛門氏から聞いた話

元は第三鳥居の横



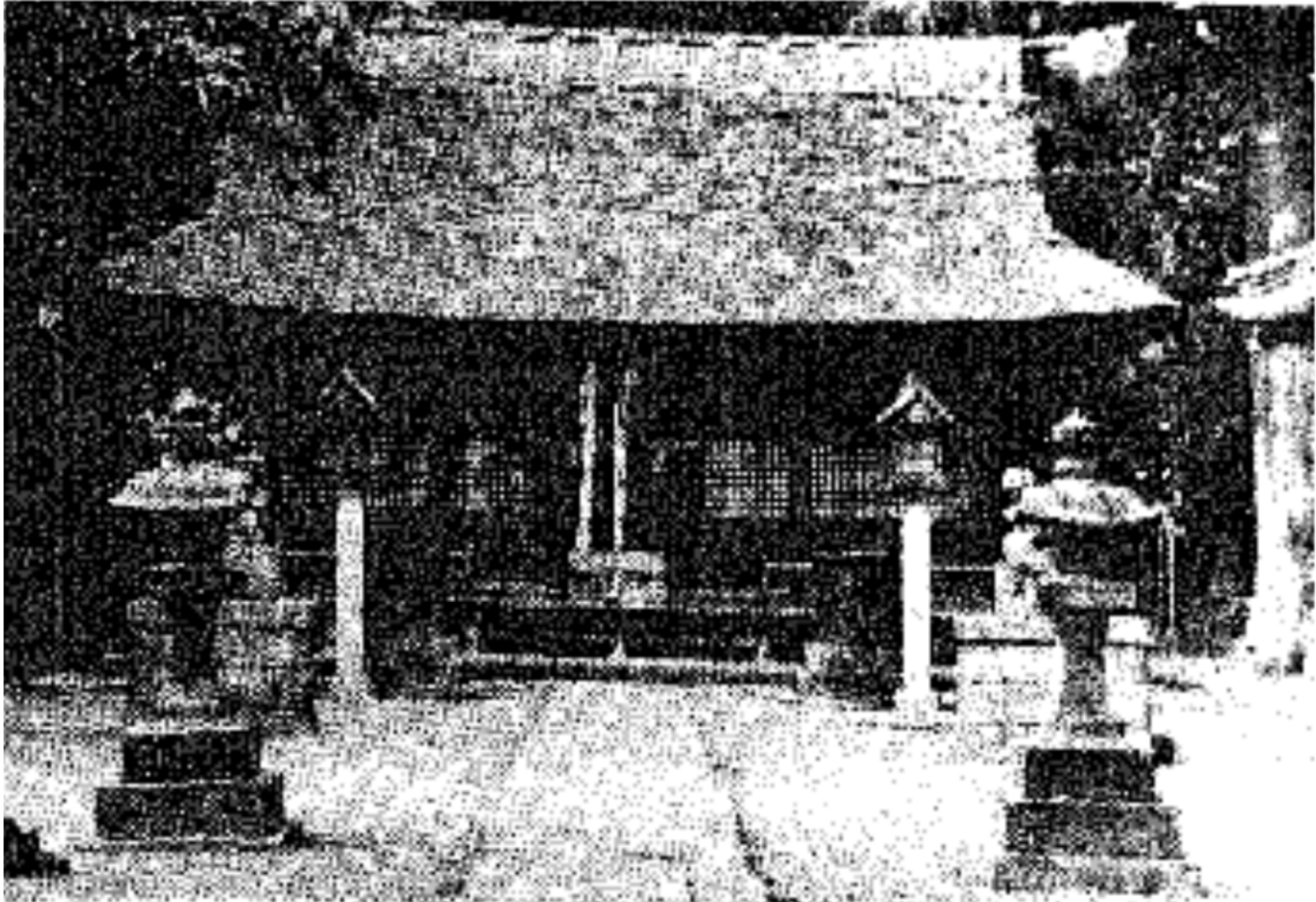
「足止めの狛犬」伝説 (拝殿の向かって両端)

昔は拝殿の前に一対として、
荒縄で縛られていた。悪所通いの夫
下の写真は現在置かれている位置。



今も伝わる「足止めの狛犬」伝説(拝殿の向かって両端)

昔は拝殿の前に一対置かれ、荒縄で縛られていた。



かつての御神木(杉の大木)



三野宮卯之助の力石



卯之助24才の時、越ヶ谷の久伊豆神社に五十貫目(187キロ)の力石を奉納している。ここで力石の奉納興行をして神社に金銭的に貢献したのかもしれない(高崎力氏)。江戸で活躍するようになる前のことである。



奉 天保二辛卯年(1831)四月
三宮卯之助持之
五十貫目
納 本町 會田権四郎

新町の八幡神社の「會田石」



写真提供：高橋誠一氏

戦後の久伊豆神社

手水舎(伝・延宝3年1675、幕末の築造か)・拝殿・藤棚



越谷市史四の資料二の内藤家の記録の七九六頁
弘化二年(一八四五)の記事参照 早川秀郎氏
龍の彫刻は、幕末の嘉永2年(一八四九)、大沢
の香取社の彫刻をした長谷川竹次郎の作品?

中野茂様所蔵写真

現在の久伊豆神社

（手水舎 龍の彫刻・拝殿・藤棚）

参道480m、境内地五千坪



竜の彫刻

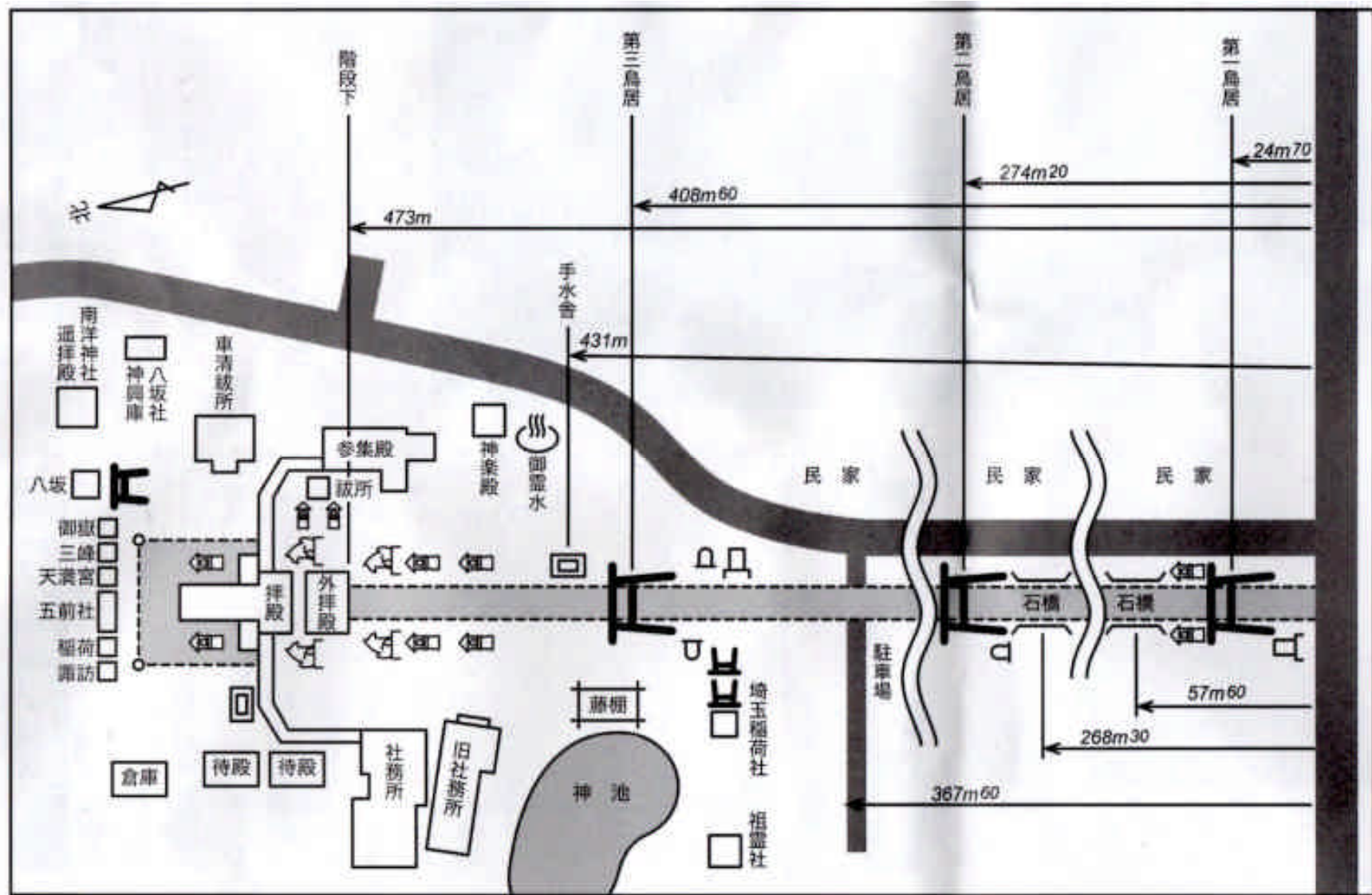
大沢の香取社の奥殿の彫刻と同時期か



関東大震災以前には自噴した池跡



越ヶ谷の久伊豆神社の境内図



久伊豆神社の勢力範囲



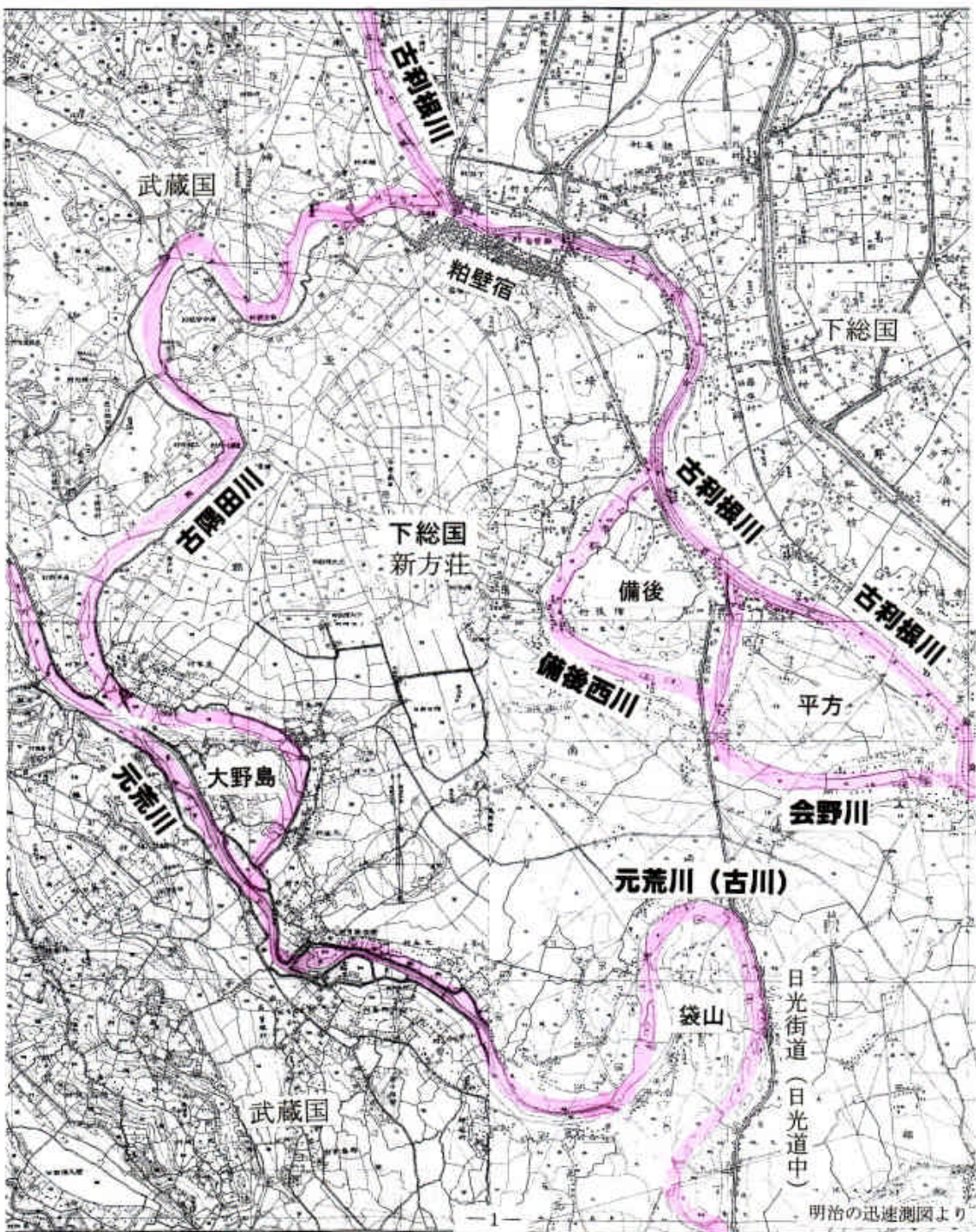
元荒川・古隅田川
大沢橋（境大橋）

元荒川・古隅田川

大沢橋（境大橋）

古利根川（慶長17年）

庄内古川（寛永年間）



越ヶ谷の久伊豆神社は

- ・社伝によると創建は平安末期とされる。
新編武蔵風土記稿によると、
創建は戦国時代(室町)の天文4年(1535)。
- ・四町野村(現・宮本町)の鎮守である。久伊豆とは陸続き
神輿、一本幟旗(第3鳥居)、大(おお)注連縄(道路際の入口)は
すべて四町野村の人が行う。
大注連縄は、四町野村の人が三本で編む「みつぐり?」、
大野伊右衛門家前の元荒川の舟で寺橋まで運んだ。
- ・越ヶ谷郷の総鎮守でもある。
越ヶ谷郷の四町野村、越ヶ谷宿、瓦曾根村、
神明下村、谷中村、花田村と七左衛門村(推定)
の七ヶ村の総鎮守でもある
大沢町は新編武蔵風土記稿によると誤って越谷領に入れ、大沢町と
されているが、誤りであろう。大沢町は香取社の勢力範囲である。

越ヶ谷の久伊豆神社は

- ・江戸時代は七星氏が迎摂院の僧侶と久伊豆社の神主を兼ねる。

明治になって増森の松井氏⇒池田氏

戦後からは小林茂氏

四町野の大野伊右衛門氏・山崎長右衛門と
粕壁の八幡社の神主による招へいにより着任。

寺橋と久伊豆社の入口の大注連縄 (戦前)

大野光政様所蔵



寺橋と久伊豆社の入口の大注連縄 (戦前)



濱野肇様所蔵

道路に面した入口の「大注連縄」現代 四町野村(現・宮本町)の人が作成



久伊豆神社の大注連縄づくり(宮本町) 昭和50年頃



大野光政様所蔵

久伊豆神社の参道（第一の鳥居）



第一の「鳥居」



参道の両側は、かつては古木の松並木。
現在は、成長の早いメタセコイア

メタセコイヤ



第二の「とりい」



第三の「とりい」そば

(元は伊勢神宮の宇治橋そば
板垣南御門拝殿より運ばれた)



久伊豆神社の拝殿



足止めの狛犬、足を麻縄（昔は荒縄）で縛って願掛け、遊里通いや家出の防止
三野宮卯之助の力石、日本一の力持ち
本殿裏側の力石、重石（おもし）としての要石（かなめいし）？

越ヶ谷の久伊豆社の本殿裏の力石



奉納、二拾貫余、米蔵」



越ヶ谷の久伊豆神社の本殿裏の敷地内にある力石は、神社を守る地鎮の役割をするために「重し」として設置された「かなめ石」かもしれない（大谷達人氏）。

戦前の久伊豆神社

洋服を着て名札を胸に付けているので昭和14・5年か。

子供たちの後ろには神前灯籠が一对見られる。その手前が石灯籠一对、さらに手前には大きな石灯籠が一对ある。
向かって右端には杉の巨木の神木の一部が茂って見られる(今は切り株のみ)。



米長・桃木宏様所蔵



水道の掘削

昭和30年代半ば
久伊豆神社の近くにて

濱野肇様所蔵

久伊豆神社の藤



越谷久伊豆神社の藤

久伊豆神社の藤

天保8年(1837)に流山から樹齢50年の藤を舟で運ぶ、流山村の平田篤胤門人？
明治の頃は、牛島の藤とともに関東の双璧と呼ばれた(明治43年5月4日の埼玉新報)



国学の四大人(しうし)

四人の国学者

- 荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤
覚え方
- 「国学にか**っ**た**か**も、も**っ**と**ひ**ら**た**く**い**え」

今は無き平田篤胤の仮寓跡(参道側)



平成10年越谷市教育委員会発行「越谷市の文化財」

今は無き平田篤胤の仮寓跡（池側）



久保村修治様所蔵

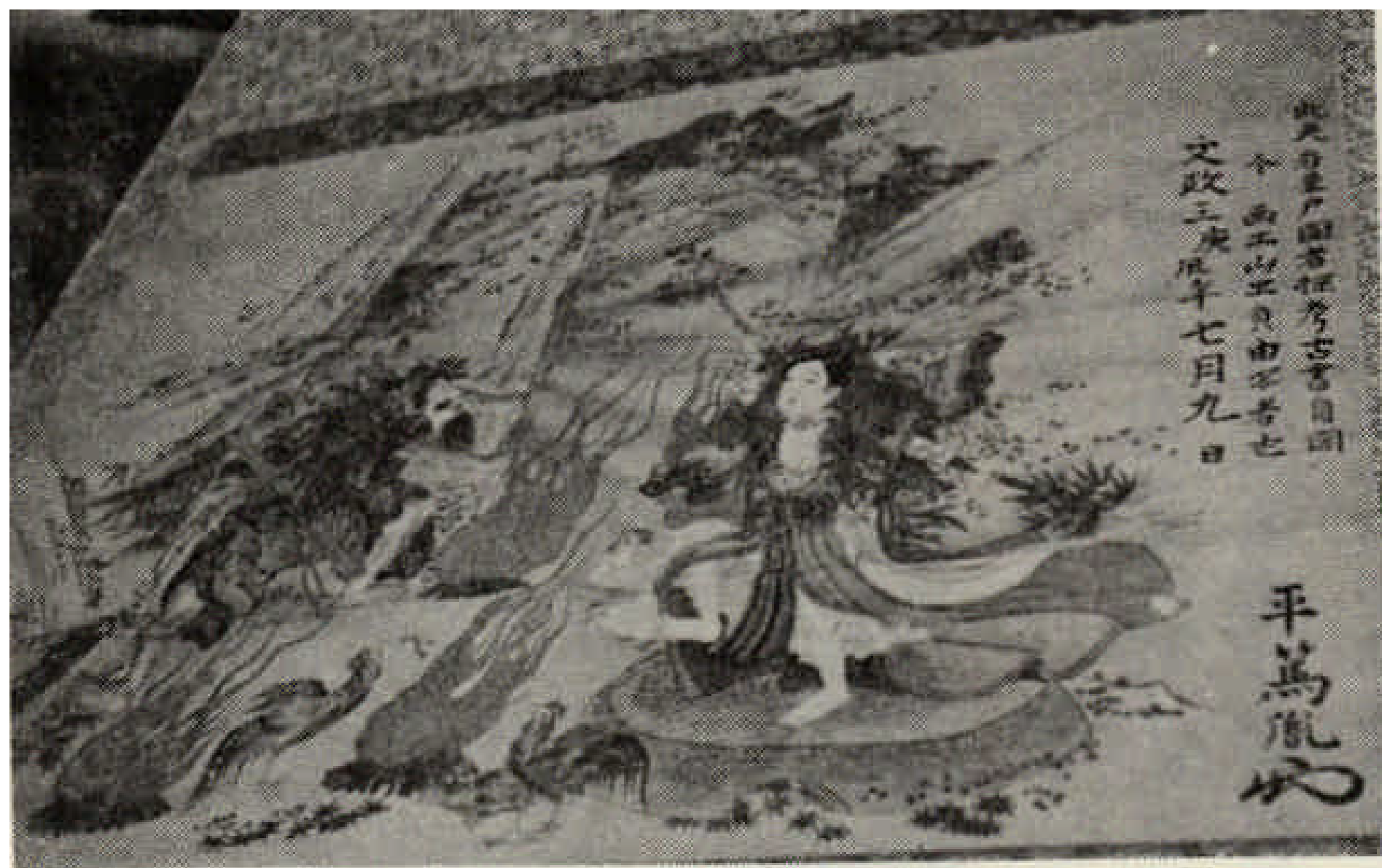
今は無き平田篤胤の仮寓跡（池側）



昭和46年越谷市教育委員会発行「越谷市の文化財」

平田篤胤の寓居跡の現在の様子





此天門圖者恒考古書自
今西土山王由志寺七
文政三庚辰年七月九日

平為胤

篤胤奉納の「天之岩戸開之図」（越谷久伊豆神社蔵）

此天岩屋戸図者、探考古書自図
令 画工・山里貞由写者也

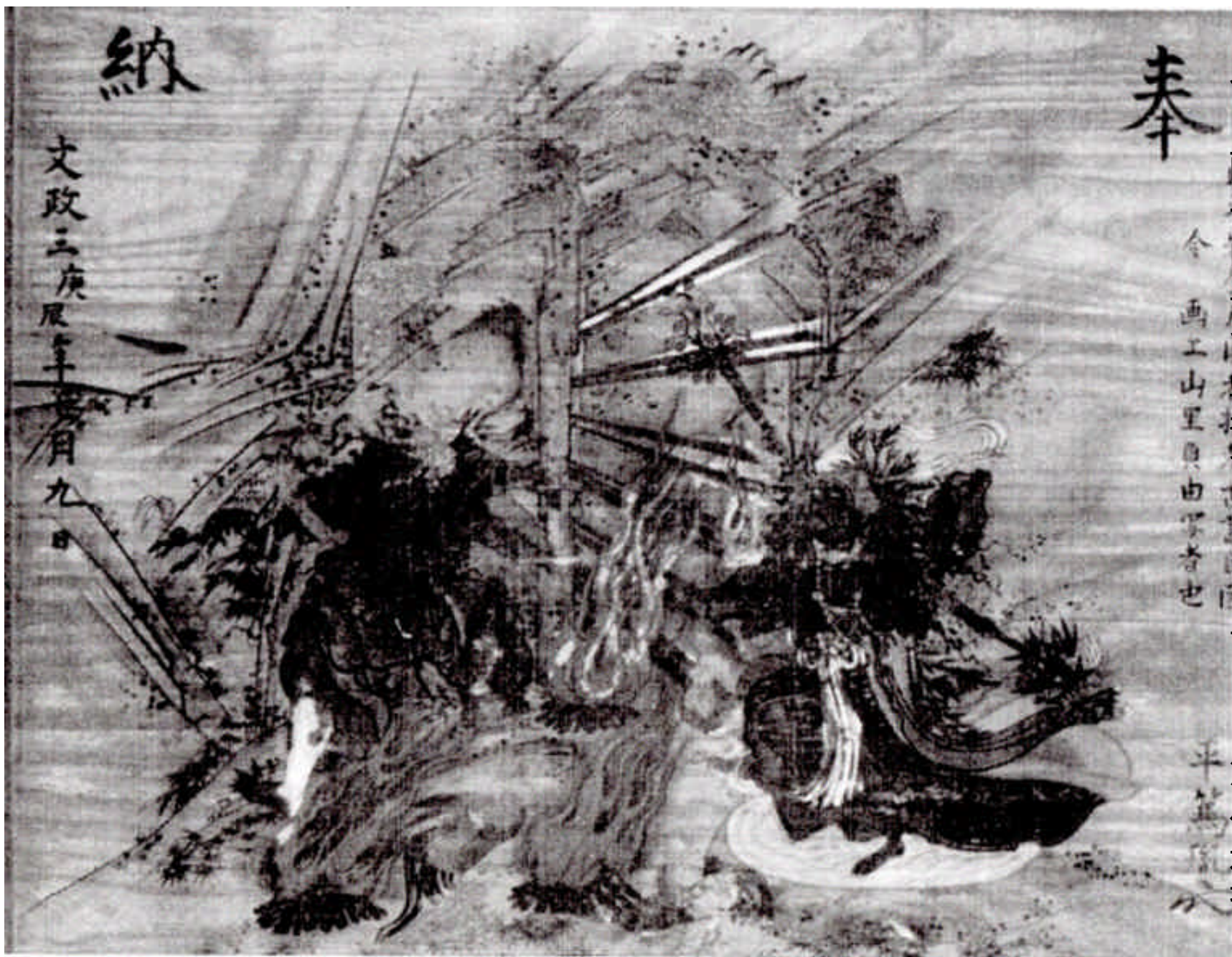
平（たいらの）篤胤 花押

今 画工・山里貞由写者也

奉

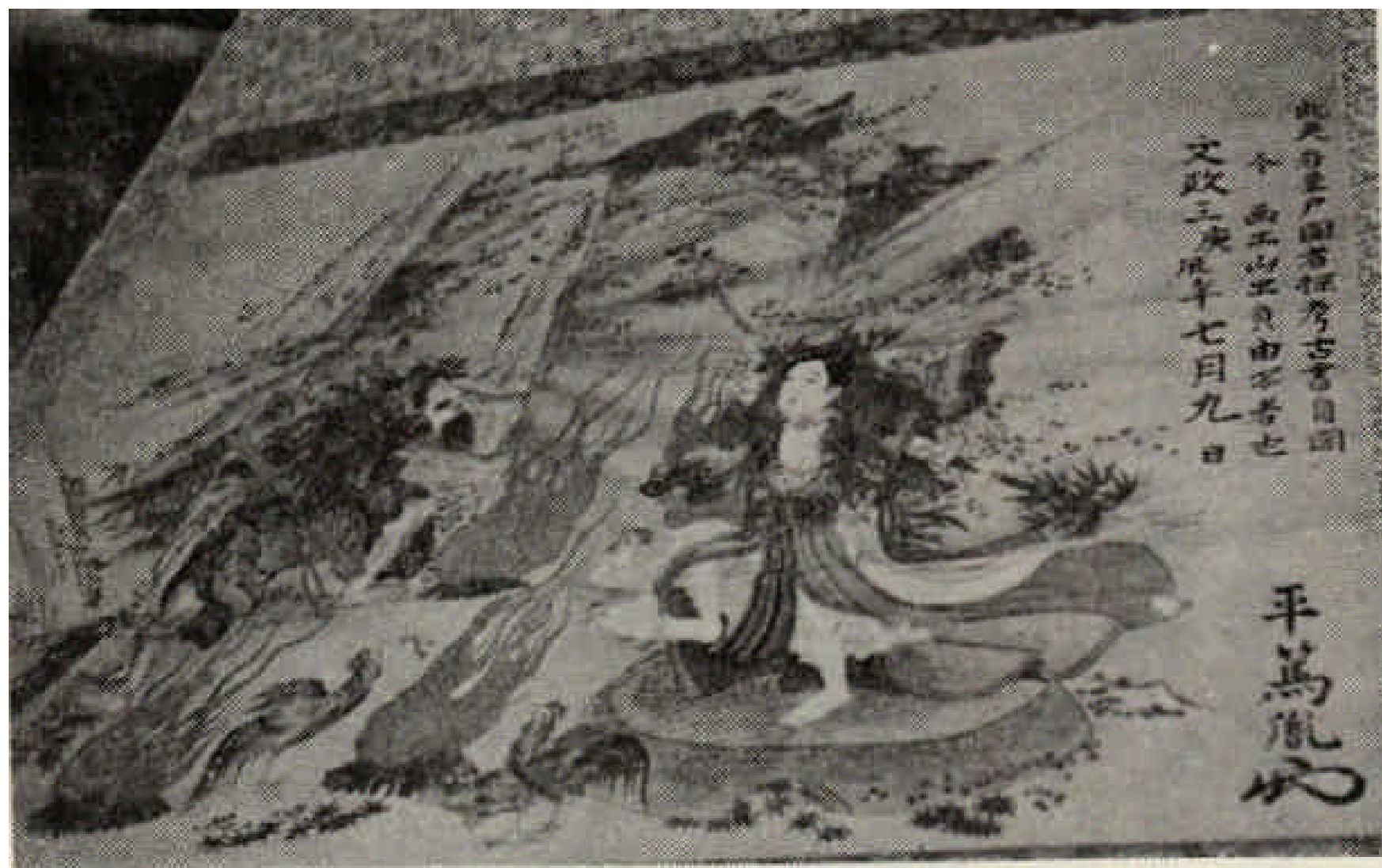
納

文政三庚辰年七月九日



文政三庚辰年七月九日

※篤胤は平氏の流れ？



篤胤奉納の「天之岩戸開之図」（越谷久伊豆神社蔵）

絵馬

此天岩屋戸図者探考古書自図
令 画工・山里貞由・写者也

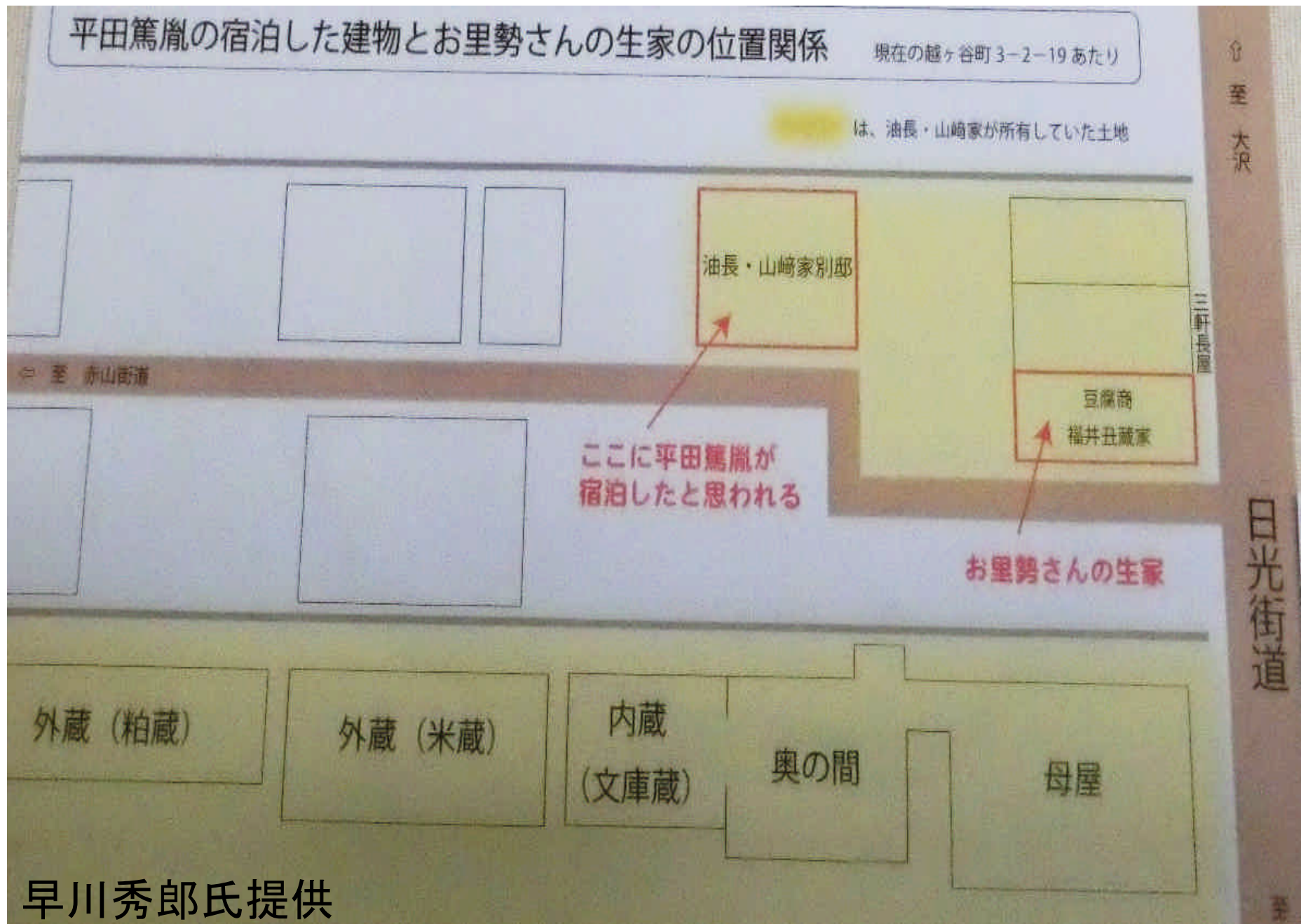
平（たいらの）篤胤・花押



文政三庚辰年七月九日

※ 篤胤は平氏の流れ？

平田篤胤と油長山崎長右衛門家



国学の四大人(しうし)

四人の国学者

- 荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤

覚え方

- 「国学に**か**った**か**も、も**っ**と**ひ**ら**た**く**い**え」

久伊豆神社の秋祭り

- 地元では「サイジン(祭神)様のお祭り」。
- 毎年9月28日に神社主催の例祭。
- 戦前の秋祭りは、毎年9月28, 29日の両日行われたようだ。
- 秋祭りは毎年実施が本来、近年は二・三年おきの十月に二日間実施。
- 俗称「バカ祭り」の由来は、終戦直後、町あげての祭りを新聞記者が感心して、(山車の時の大盤振る舞いの飲食のばか騒ぎが)「ばかに盛大なもの」と新聞に掲載したことによる。

久伊豆神社の秋祭り

- 昔の山車(本一の竜神、本二のかつての猩々)は三層構造でかなりの高さ、電燈線の架設にともなって今では二層に改装。
- 久伊豆社の例祭の渡御・還御は今から三百年以上前の元禄年間に始まったと伝えられる。
- 山車(だし)は、江戸の神田明神や山王の祭りの影響を受けて、明治になって一部購入して取り入れられたようだ。
- 山車に欠かせない越谷独自の木遣り歌(越谷市の文化財)も大切。

越ヶ谷の秋祭りの現状

商人の財力と職人の心意気が伝統を守り続けてきた越ヶ谷秋祭りの最盛期は終わりました。

商店街の衰退に加え、祭りや歴史に対する関心や近所付き合いが薄れつつある現在、更なる縮小化は避けられません。

(後略)

2016(平成28)年秋 記す

「新石三丁目お祭りのしおり」子供会用より抜粋

令和元年は秋祭りが10月12日・13日(土日)に実施

平成28年10月8日・9日

10月8日 土曜日

神輿渡御

久伊豆神社 午前 9:50 より祭典
御仮舎 午後 1:30 到着(予定)
山車曳廻し 午後 4:00 ～ 午後6:10
山車曳廻し 午後 7:00 ～ 午後9:10



10月9日 日曜日

神輿還御

山車曳廻し 午前10:30 ～ 午後12:40
御仮舎 午後 2:00 より祭典
久伊豆神社 午後 5:00 到着(予定)
山車曳廻し 午後 7:00 ～ 午後 9:10



秋祭りの渡御行列順序(平成28年)

神輿渡御行列順序	
〈先頭より〉	
一、	年番金棒
二、	お祭子
三、	年番青年
四、	表町青年OB
五、	金棒四人
六、	副宰領
七、	先祓
八、	前導神職
九、	雑色
十、	太鼓
十一、	社名旗
十二、	榊
十三、	神剣
十四、	青龍
十五、	朱雀
十六、	白虎
十七、	玄武
十八、	御鉾
十九、	御弓
二十、	御太刀
二十一、	楽人

二二、	稚児巫女
二三、	監督
二四、	年番警護
二五、	神社世話人
二六、	来賓前導神職
二七、	来賓
二八、	金棒三人
二九、	錦旗
三十、	宰領
三一、	御幣
三二、	紫翳
三三、	神輿
三四、	管翳
三五、	供奉神職
三六、	氏子総代
三七、	辛櫃
三八、	台持
三九、	木遣保存会
四十、	後衛神職
四一、	奉仕会
四二、	氏子参加
四三、	山車八台

先導の神主



那倉勝江氏所蔵

花笠・袴（肩衣と袴）、当時の石畳が狭い参道

那倉勝江氏所蔵



戦前は紋服

町内の青年会



那倉勝江氏所蔵

白装束の四町野村(現・宮本町)神輿担ぎ手



那倉勝江氏所蔵

久伊豆神社の渡御

祭神様の越ヶ谷町へお出まし

御神輿は神様が乗られているので

厳かに進むのが本来。**厳かに！**





鳳凰を備えた神輿
鳳輦(ほうれん)と呼ばれ、
本来は天皇が乗る乗り物

久伊豆神社の「おみこし」(神輿渡御)



神輿を乱暴に扱う特別な例

千葉県印西市の石尊・阿夫利神社の例祭 神輿の「梯子立て」



地面にずどーん！

赤い口紅と白い白粉の稚児行列



久伊豆神社の秋祭りの山車(だし)



山車の曳き歌として、越谷独特の**木遣り歌**(越谷市の無形文化財第1号)も欠かせない。



昭和63年頃、染谷隼生様所蔵

住宅廃材で山車作る 越谷市の職人 染谷隼生さん



廃材で造った山車と
◀染谷さん（染谷さん
宅の「倉庫」前で）

全長5.1m、重さ1.5トン

染谷さんはとび職人として、市内外の住宅の建設や解体の仕事に従事。今から40年前の1973年ごろから「一生かけて自分の山車を作りたい」と構想を練り

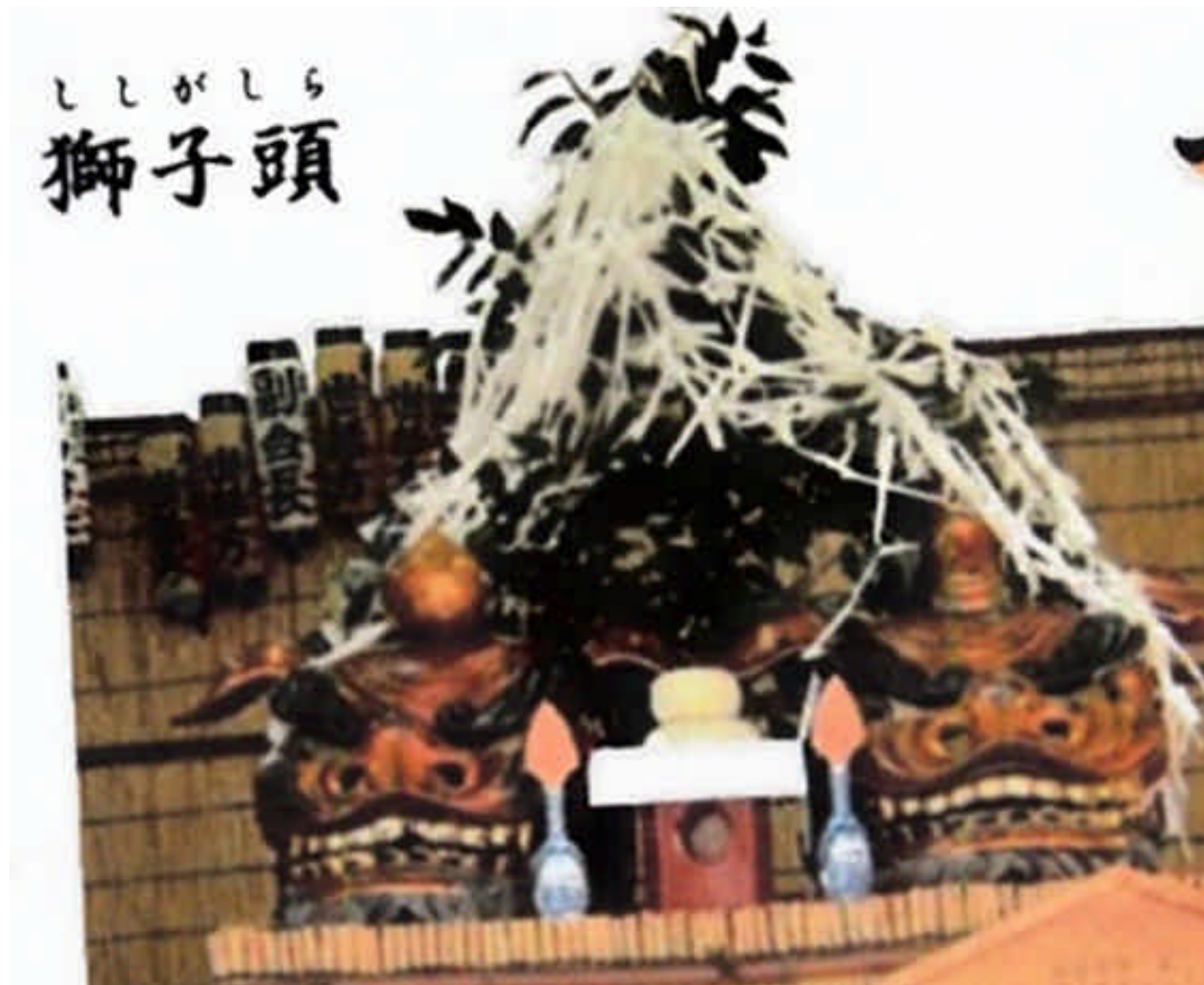
始め、仕事の際に出る屋根や柱の建材を再利用しようと、材料集めから始めた。1977年から少しずつ作り始めた。山車の屋根は実際に使っ

越谷市越ヶ谷のとび職人、染谷隼生さん（87）はこのほど、廃棄処分となった住宅の屋根や柱など廃材だけを使って山車を作り上げた。こつこつと36年の年月をかけた「労作」で、全長5.1m、高さ4.1m、重さ1.5トンの見事なもの。29日の「越谷市民ま



「試運転」で引かれる山車（越谷駅西口で）

三輪



新石三丁目に飾られる
獅子頭

秋祭りに

新町では江戸時代に獅子舞が
行なわれていたのであろう！

写真は新石三丁目「お祭りのしおり」(平成28年度・子供会用)より引用



越ヶ谷秋まつり会場案内図



越谷駅



山手引道線
交通規制
交通規制 / 午前10:00～午後5:30

一平ミスター
マックス

三井東京
UFJ銀行

駅前通り

越谷
ツインシティ
ロビー

正統通り

越谷
ツインシティ
ロビー

越ヶ谷小学校

浦和通り

浦和通り
越谷西三丁目

御飯会

浦和通り

元荒川

瓦曾根
ロータリー

平井中

公園

エレファン

三友保蔵所

大沢橋



埼玉
信用金庫

とろろ

三久生豆社

大沢橋

大沢橋

大沢橋

本町一丁目の竜神

竜神のお面を外した顔





本町一丁目

久伊豆神社の秋祭り・ 江戸期の鼠屋五兵衛作「龍神」



元は三層、明治に購入



本町一丁目
(中町の産業会館周辺)
もとは神田祭るか山王祭り
より購入した三層であった)

三輪

山車の出典: japanfestival.web.fc2.com/8/koshigaya/koshigaya.html

昭和 20 年 7 月

本町一丁目の山車の様子 お面をかぶった龍神様

写真提供は大野幹夫氏



奥に大沢橋のたもとの火の見櫓が屋根の上に見える

江戸期の三層の山車

神田月神の27番小鍛冶と小狐

越ヶ谷の本一の山車も
これ程にないにしても
今よりずっと高かった



高くて圧倒し、目立つ



本町二丁目

久伊豆神社の秋祭り・「楠正成」(現在)

本来は楠木正成ではなく、三層の猩々

三層の猩々は江戸期の神田明神の山車を本二が入手

三
輪



本町二丁目
(河内屋旅館
あたり)

昭和20年代の

本町二丁目の山車の様子

大野幹夫様所蔵



幻の山車「猩々(しょうじょう)」(提供: 鈴木竹美津氏)

南越谷のコミセンにて展示

(元は三層の猩々、江戸期の神田明神の山車を本二が入手、のち源兵衛家が本二より購入し、所有)

三層



幻の山車「猩々(しょうじょう)」(写真提供:鈴木竹美津氏)

南越谷のコミセンにて展示

猩々は、大酒飲みで、体は猿、赤い体毛に覆われ、声は小児



江戸三大祭り

神輿深川、山車神田、だだっ広いが山王

深川区

神田区

麹町区

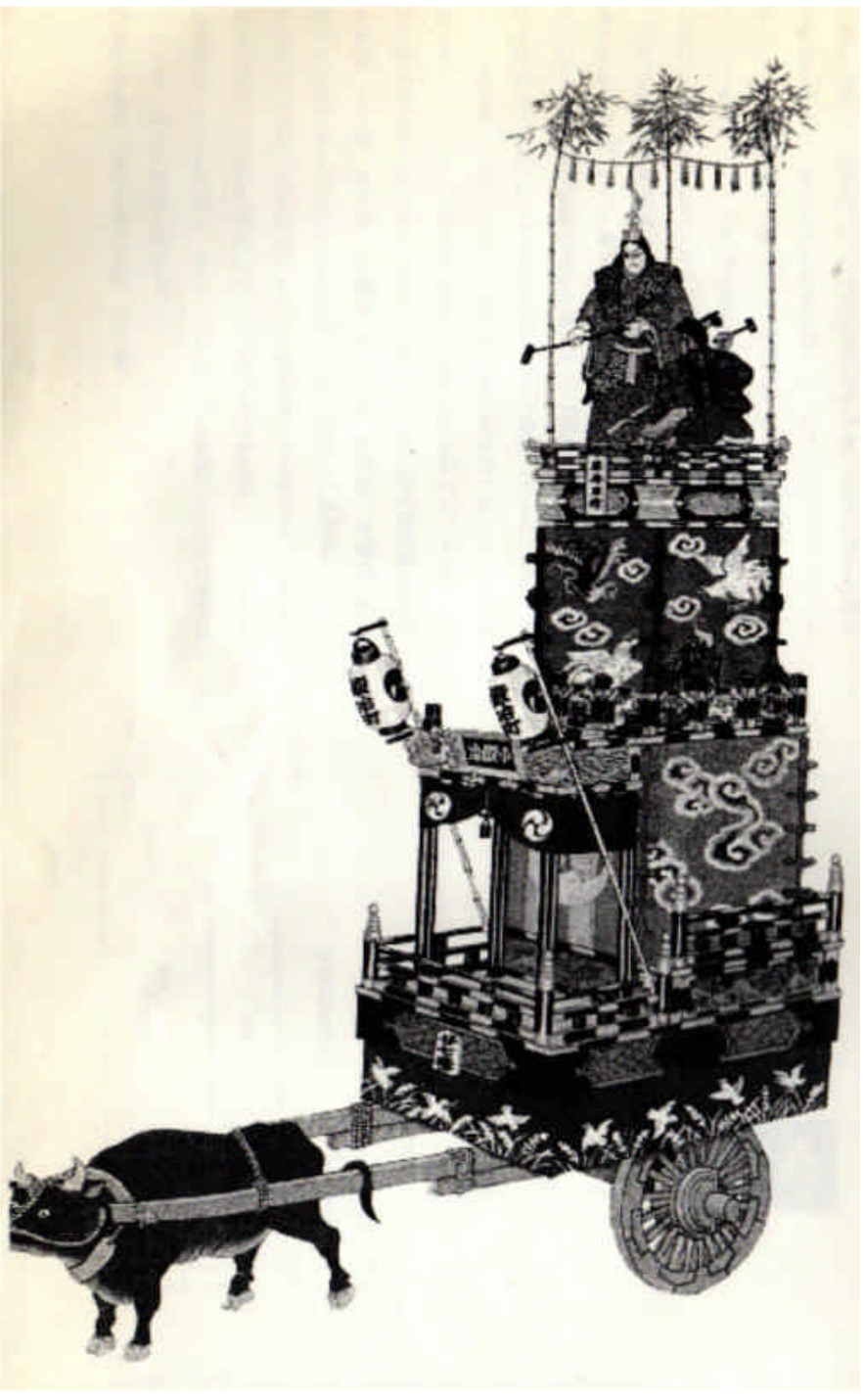
- ・古老から「山車は明治初期に日本橋区から、越ヶ谷は2台、大沢は1台、合わせて3台購入」(鈴木竹美津氏)。
- ・3台の山車は四ツ目屋(浜野氏)が荷車に載せて越ヶ谷迄もってきたという。(染谷隼生氏)
- ・本一の「竜神」・・・江戸期の鼠屋五兵衛作、もとは神田祭りか山王祭りより購入した三層。今は二層。
- ・本二の「猩々(しょうじょう)」・・・三層、江戸期の神田祭りの山車を購入、のち源兵衛家所有。

江戸期の三層の山車

神田月神の27番小鍛冶と小狐

越ヶ谷の本二の狸々も

このように高かったのだらう



高くて圧倒し、目立つ

山車飾り「猩々」

この山車飾りは、大正の中ごろまで越ヶ谷本町2丁目の山車として使われていたもので、江戸時代の文久元年（1861）に作られたものです。もとは江戸赤坂表伝馬町1丁目で使われていたものを、明治の初めに越ヶ谷本二の町会が買い受け、長い間、越ヶ谷の秋まつりに引き廻されていたものです。そのころ、保管場所に困っていたこの山車を現所有者の亡父鈴木源兵衛氏は、越ヶ谷ゆかりのこの山車が他所へ流出することは残念であると、永く個人で秘蔵することにし、昭和28年に、東京国立博物館に保管を依頼していたのですが、今日の催しのため、所有者と東京国立博物館の特別の配慮で、30年ぶりに越ヶ谷に里がえりしたものです。

人形は、大名が猩々（しょうじょう）の仕舞を舞う姿で、法橋仲秀英の作です。この作者は、川越松江町2丁目の山車人形である（満島）の作者と同じで、川越の山車は、県指定の文化財にもなっています。

山車飾り「猩々(しょうじょう)」

この山車飾りは、大正の中頃まで越ヶ谷本町2丁目の山車として使われていたもので、江戸時代の文久元年（1861）に作られたものです。もとは江戸赤坂表天満町1丁目で使われていたものを、明治の初めに越ヶ谷本二（ほんに）の町会が貰い受け、長い間、越ヶ谷の秋まつりに引き廻されていたものです。

その頃、保管場所に困っていたこの山車を現所有者の亡父源兵衛氏は、越谷ゆかりのこの山車が他所へ流出することは残念であると、永く個人で秘蔵することにし、昭和28年に東京国立博物館に保管を依頼していたものですが、本日の催しのため、所有者と東京国立博物館の特別の配慮で、（昭和58年）30年ぶりに（国立博物館から）越谷に里がえりしたものです。

人形は、大名が猩々の仕舞(しまい)を舞う姿で、法橋(ほうきょう)仲(なか)秀英(しゅうえい)の作です。この作者は、川越松江町2丁目の山車人形である「浦島」の作者と同じで、川越の山車は、県指定の文化財にもなっています。

（ ）内は加藤が加筆しました

出自は、江戸時代に天下祭りの「山王祭」に使われた山車です（加藤）

川越の山車（県の文化財）
浦島」（釣り竿と玉手箱）

越ヶ谷の

狸々」の作者と同じ



三層



本町三丁目

久伊豆神社の秋祭り・「素戔鳴尊」



本町三丁目
(大沢橋以南、現在の
市神社いちがみしゃ周辺)

三
輪

昭和 50 年頃の
本町三丁目の山車の様子
米長「桃木宏様所蔵」





中町

久伊豆神社の秋祭り・「鍾馗様」



三輪



仲 町
(中町自治会館
周辺)

新石一丁目



石(こく)Ⅱ 穀」の意味で使用。

穀」の漢字に代わって

簡易な漢字 石」で表現した。

(染谷隼生氏からの聞き取り調査)

新石一丁目の山車

レイクタウンのイオン



神武天皇

三輪

久伊豆神社の秋祭り・「神武天皇」



金色のトビ



新石一丁目
(栃木銀行周辺
越ヶ谷一丁目)



新石二丁目

久伊豆神社の秋祭り・「鍾馗様」



新石二丁目
(旧・駅前通りと
日光街道の交叉点、
新町の八幡神社周辺
越ヶ谷二丁目)

昭和34年、新石二丁目の

山車の様子

写真提供は三床様



中町と新石二丁目が同じ人形の鍾馗様



中町
しょうき

鍾 馗



新石二は本来は女性の
神功皇后

新石二丁目の山車の人形が
中町と同じ人形の鍾馗様
新石二丁目には新町の鎮守
八幡神社がある。

八幡様の祭神は応神天皇
本来なら新石二丁目は応神天皇
新石二丁目の人形は応神天皇の
母親・神功皇后だった

新石二丁目だけ女性だった。

現在は、新石二丁目は
中町と同じ鍾馗を採用



新石二丁目
しょうき

鍾 馗



[illegible]

久伊豆神社の秋祭り・「弁慶」



新石三丁目
(明詩社書店

三輪 周辺
越ヶ谷三丁目)



弥生町

久伊豆神社の秋祭り・「日本武尊」



弥生町
(越谷駅東口周辺)



〔素戔鳴尊〕
すさのおのみこと

本町三丁目



くすのきまさしげ
楠木正成

本町二丁目



りゅうじん
竜神
竜神のお面を取ったお姿

本町一丁目



〔鍾馗〕
しょうき

中町



〔弁慶〕
べんけい

新石三丁目



〔鍾馗〕
しょうき

新石二丁目



〔神武天皇〕
じんむてんのう

新石一丁目



〔日本武尊〕
やまとたけるのみこと

弥生町

街道沿いの「表町八ヶ町」
本町一～三・中町・新石一～三・弥生

「街道裏の裏町」
新道・音和（観音横町）・御殿町・柳町・宮前・
東宮前・中町西・四丁野道・袋町・元御殿
以上で行なわれた

年番は、表町八ヶ町で順送りとなる

戦前、大沢橋を渡って現在の野田街道
との交叉点迄繰り出した、正面は饅頭屋
南側は瓦曽根ロータリー迄



大沢橋を渡御する戦前の
貴重な写真・提供は 宋長

桃木宏氏所蔵

御仮屋(昭和25年頃)三丁目年番



「米長」桃木宏様所蔵

戦前(総ヒノキの御仮屋、大沢橋そば)昭和2・3年



「米長」桃木宏様所蔵

戦前の秋祭り渡御（笠と古式装束・紋服）

後ろに大沢橋そばにあった火の見櫓が見える



「米長」
桃木宏様所蔵

戦前の秋祭り(白装束の四町野村の人々)



「米長」
桃木宏様所蔵

久伊豆社は
下総国の埼西(きさい)郡
に広まる

野与(のよ)党の氏神
だった

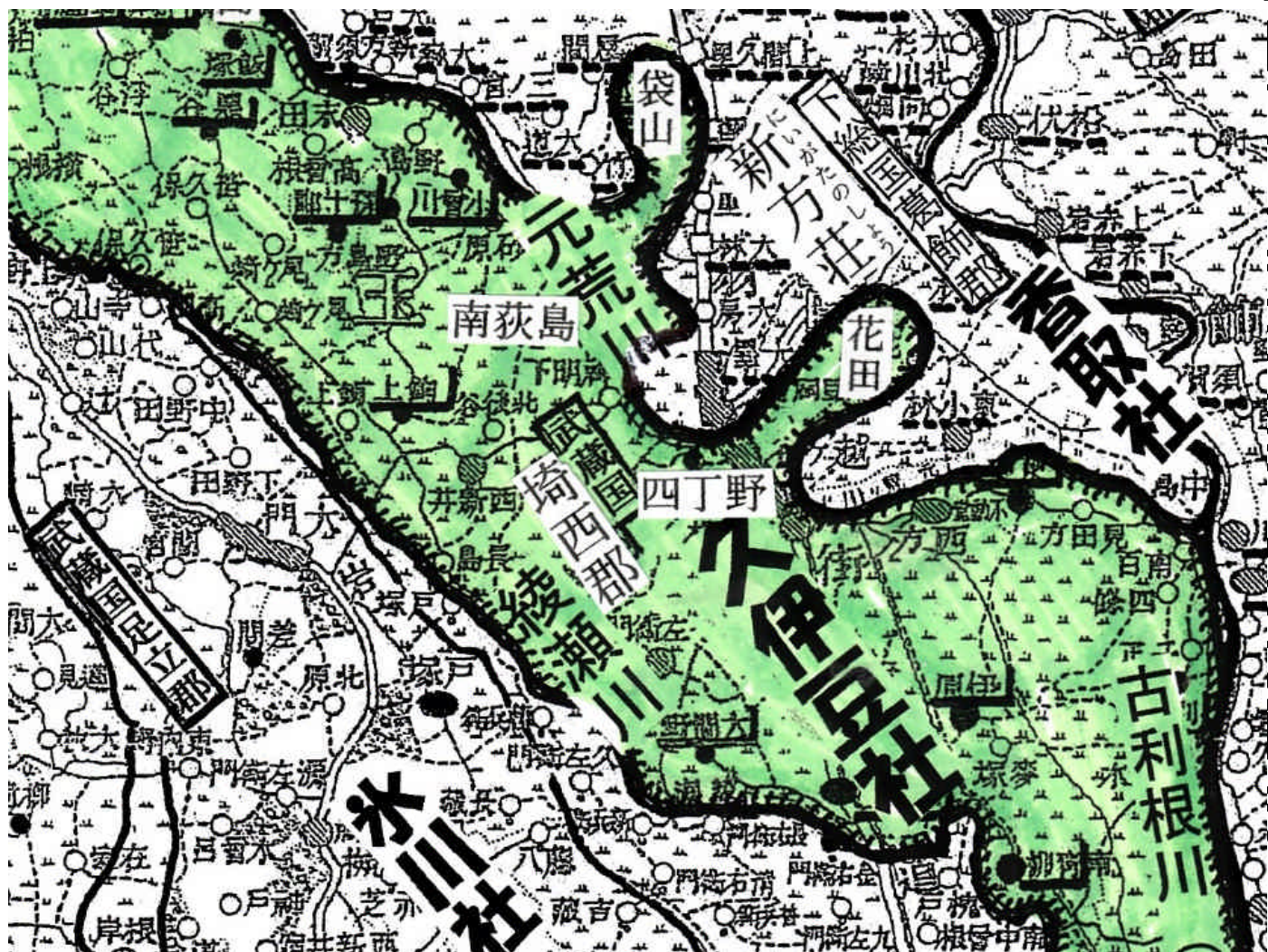
久伊豆神社の勢力範囲



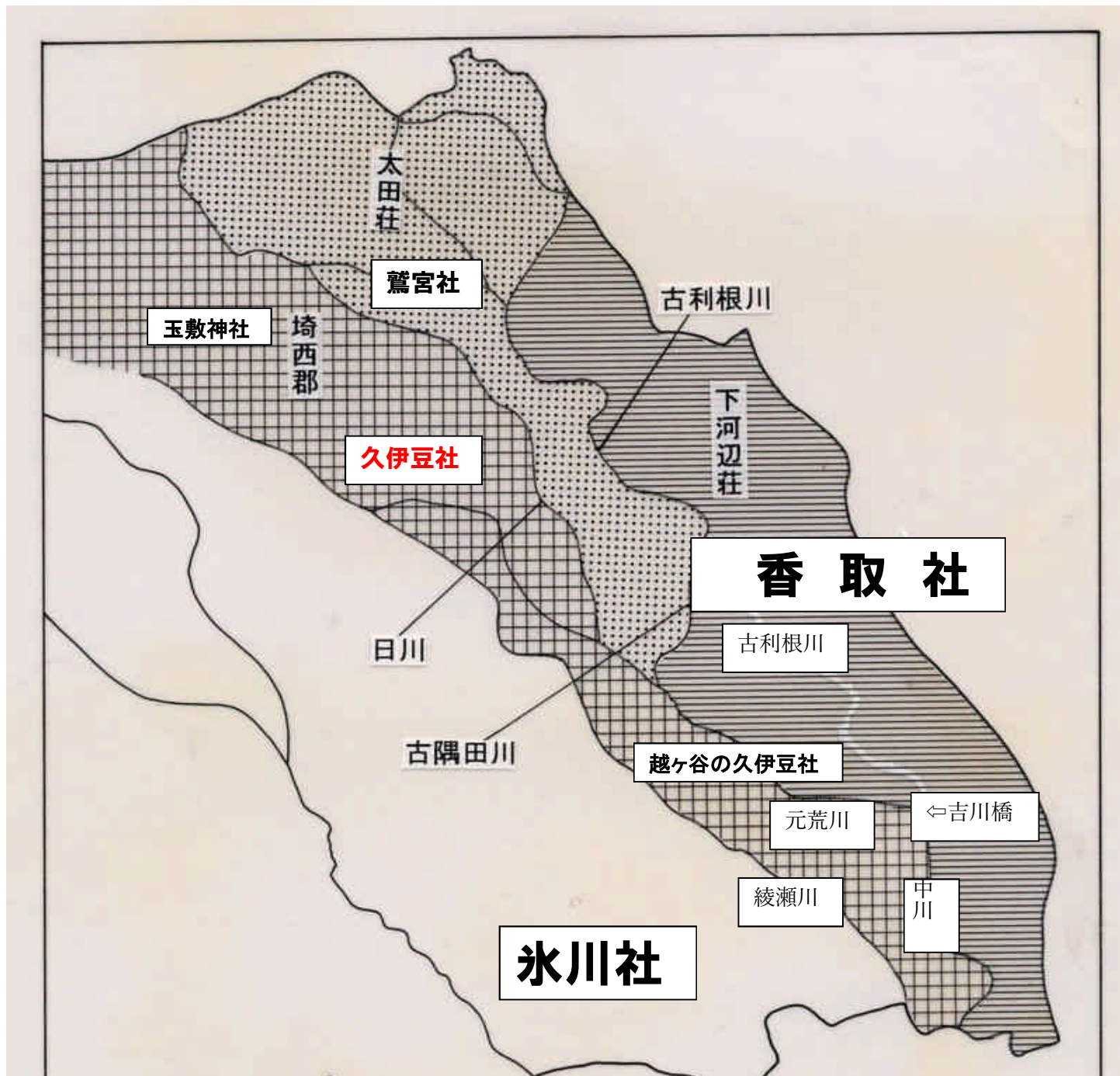
久伊豆神社の分布

袋山や花田は

南荻島や四町野と連続き



奇西郡



久伊豆社の本社は

騎西町（現在は加須市騎西）の
玉敷（たましき）神社？

中世から江戸時代後半まで「久伊豆
大明神」とも称され、埼玉郡の総鎮守
として「騎西の明神様」の名で尊崇
されていた。

「久伊豆」社の名前の由来

ー仮説の紹介

久伊豆の「伊豆」は「出雲」が由来！

出雲＝伊豆 久毛（万葉仮名：いず くも⇒出雲）

久伊豆の久は訓読み、伊豆は万葉仮名

久伊豆＝「久しい出雲」という意味か

久伊豆神社の祭神＝大国主命（おおくにぬしのみこと）

出雲大社の祭神 ＝大国主命（おおくにぬしのみこと）

大河戸御厨（おおかわどみくりや）の 神人（じにん）と久伊豆社の神人の争い

- 鎌倉時代の「吾妻鏡（あずまかがみ）」

建久5年（1194）、源頼朝の時に

伊勢神宮（外宮）の領地である大河土（戸）御厨で
地元の久伊豆宮の神人（じにん）と大河戸御厨の
神人とが喧嘩して騒動を起こしている。

大河戸御厨は埼玉郡の騎西と足立郡にまたがる地。

よそ者に対する地元の久伊豆社の反抗である

この久伊豆社は現・玉敷神社か、一説に越ヶ谷の久伊豆社

「久伊豆神社の歴史と秋祭り」

ご清聴

有難うございました。



加藤幸一